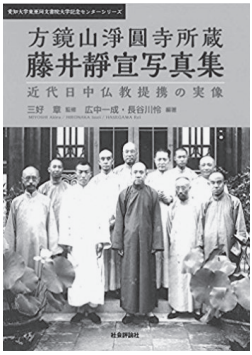
仏教から近代日中交流史を読み解く
――『水野梅暁』『藤井静宣』両写真集に寄せて

長谷川怜・広中一成・松下佐知子編著
『鳥居観音所蔵 水野梅暁写真集
――仏教を通じた日中提携の模索』
社会評論社／2016 年 3 月／192 頁／2300 円＋税



長谷川怜・広中一成編著、三好章監修
『方鏡山浄圓寺所蔵 藤井静宣写真集
――近代日中仏教提携の実像』
社会評論社／2017 年 3 月／160 頁／2000 円＋税

柴田幹夫

今から数年前、東アジア仏教運動史研究会（代表：槻木瑞生同朋大学名誉教授）有志で、愛知県豊橋市にある藤井静宣の自坊浄圓寺の調査に加えていただいたことがある。その調査のおりに、今回紹介する二冊の『写真集』の編者の一人である広中一成氏を相識った。そのおりに彼から「近々愛知大学で水野梅暁と藤井静宣に関するシンポジウム[1]を行いますので、是非お越しください」と丁寧な案内をいただいた。書評子は、新潟在住のため、この申し入れには残念ながら応えられなかった。シンポジウムは水野梅暁に関するもので、当然今回紹介する鳥居観音所蔵の水野の写真や藤井静宣に関わる写真にも話は及んだと思われる。

ご承知の通り、水野梅暁と藤井静宣は、愛知大学の前身校であった東亜同文書院の関係者[2]であり、ともに日中の仏教交流史に大きな足跡を残した人物である。今回縁のある愛知大学現代中国学会編『中国21』において、彼ら二人の『写真集』を紹介できるのは、浅学非才の身でありながら、また書評するに能力不足

を感じつつも無上の喜びである。

＊　＊　＊

さて『水野梅暁写真集』であるが、標題にあるように、埼玉県飯能市名栗にある鳥居観音所蔵のものである。鳥居観音は、平沼弥太郎（一八九二－一九八五）によって創設されたものであるが、平沼はいわゆる当地の名望家で、飯能銀行や埼玉銀行などの頭取を務め、戦後は参議院議員などを歴任した人物である。平沼と水野との関わりは、一九三五年、脳溢血で倒れた水野が主治医の妻の実家である平沼家で療養したことに始まる。先の戦争末期、東京大空襲のおりに、水野の自宅から家財道具一式が、平沼のもとに運ばれた。その中には、水野が中国の要人たちから寄贈された書画類や夥しい写真が含まれていた。さらには、玄奘三蔵の遺骨も含まれていた。[3]

また孫文（一八六六－一九二五）や黄興（一八七四－一九一六）などといった中国の革命家をはじめ、太虚（一八九〇－一九四七）、王一亭（一八六七－一九三八）などの仏教者や、また犬養毅（一八五五－一九三二）などをはじめとする政治家たちの姿があった。したがって、この『水野梅暁写真集』は、極めて資料的価値の高いものであると思われる。なお、鳥居観音蔵の水野梅暁の書簡類については、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター原資料部にもマイクロフィルムで保管されていることを付け加えておきたい。

『水野梅暁写真集』について、順を追って紹介していこう。まず、目次を掲載する。

第一章　水野梅暁と仏教
第二章　水野梅暁と中国革命
第三章　水野梅暁と中国外交
第四章　水野梅暁と満洲
第五章　水野梅暁と中国人脈

の五部構成となっており、さらに章ごとに、コラムが数編付け加えられている。ここではまず、簡単に水野梅暁について紹介しよう。[4] 水野梅暁は、一八七七年一月広島県深安郡福山町（現福山市）に生まれ、七歳のときに縁戚にあたる曹洞宗長善寺水野桂厳の養子となり、出家した。その後上京し、哲学館（現東洋大学）に一時籍を置いたが、京都の大徳寺高桐院高見祖厚について修行した。ついで根津一の知遇を得て上海にあった東亜同文書院に学んだ。ただ正規の学生ではなかったようである。同文書院に在学中、水野梅暁は自分の使命を中国と日本の仏教とを結合させることと考えるようになったという。在学中に浙江天童山に如浄の墓塔を拝し、住職の敬安に日中仏教との提携を約束したといわれている。卒業後、敬安の勧めにしたがって湖南省長沙に赴き、当地で「僧学堂」を開き、仏教の研究と、布教活動に従事していた。明治四二、三年ごろに松崎鶴雄、塩谷温に長沙留学を勧め、松崎は王闓運に師事し説文学を学び、塩谷は葉徳輝の弟子となり元曲を習ったという。

その後、大谷光瑞の知るところとなり、彼らは深く交流をはじめた。事実水野梅暁は、西本願寺へと僧籍を移している。

その後、梅暁は、東方通信社に入り、中国研究と調査を行っていたが、やがて『支那時報』を創刊し、その編集に当たった。また、「浩然学舎」を作り、中国での第二革命失敗後、日本に亡命してきた李列鈞、陳其美、戴季陶、殷汝灑などを援助していた。

水野梅暁の本分は、日本と中国の仏教の橋渡しを行うことであるということは前述したが、その大きなイベントは、「東亜仏教大会」の日本での開催と中国への仏教訪問団派遣であった。この二つの事業に大きく関わったのが梅暁であった。

満州国の建国にともなって、日満文化協会を創立するとともに、その理事になった。いずれにせよ、民間人として、当時の日中文化交流、仏教交流に大きな足跡を残した人であるというのは疑いがない。

第一章「水野梅暁と仏教」では、水野と近代中国仏教界との関係を概観している。水野と仏教の関わりは、家庭の影響が大きく、とくに母親は、毎朝仏壇に手を合わせていたという。水野の言葉を借りると、「子供の時から仏教の感化を受け、何等の懐疑なくして仏門に帰するやうになつた」と。まさに自然の成り行きというものであろう。水野は、師の高見祖厚の関係で、旧熊本藩主細川護久を相識り、次いで東亜同文会会長の近衛篤麿とも知り合うようになった。近衛の厚意により、東亜同文書院根津一の書生となり、上海に渡った。一九〇一年のことである。

中国仏教との関わりは、一九〇二年、湖南省長沙に行ったときから始まるが、前述した東亜同文会特派員という資格で行っている。写真1－05は、水野が長沙で設立した僧学堂「雲龍軒」の前で、当地の碩学であり、水野の師であった王先憲、王闓雲それに黄自元らと撮った写真である。さらに1－09には、同じく水野の師であった葉徳輝の写真もある。葉もまた、長沙在住の碩学で、水野をして、「湖南最後の遺老」「大学者」であると言わしめた人物である。塩谷温、松崎鶴雄などは、水野の誘いで長沙に渡り、葉徳輝に師事していた。

続く一九二六年には、先の東亜仏教大会の答礼として、中国に行くことになった。水野は対外交渉係として、視察、計画の立案から現地の交渉及び通訳まで八面六臂の活躍をした。一行は、下関から朝鮮半島の釜山に渡り、ソウル、平壌を越え、奉天、北京、天津そして上海と廻り帰国の途に就いたのである。およそ一カ月にも及ぶ大旅行であった。天津では、中華民国の大総統を務めた黎元洪の自宅を訪うている（1－39）。辛亥革命後、すぐに西本願寺から南京に派遣された水野は、革命の戦乱で負傷した人々の救護活動に従事し、黎元洪とは旧知の仲であった。団員の紹介や、記念撮影をするなど、和気藹々と行われたようである。[5]

写真1－38、40～42、44～47は、上海での歓迎会の様子である。静安寺で撮られたこの写真は、太虚や、居士であり、実業家でもあった王一亭の姿もあった。

続く第二章は、「水野梅暁と中国革命」に関するものであり、孫文や黄興をはじめとする革命派との交流を表した写真が

多い。水野がどうして革命派を支援したかという問題については、日本仏教の布教権問題が挙げられるであろう。前述した辛亥革命後、南京において、病院を設立し、革命の戦闘によって負傷した人々を救護する反面、上海において、黄興らと会見し、中国における布教権問題を話し合ったと言われる。[6] 水野の究極的な目的は、日本人僧侶が、人道的な布教活動によって、日中両国の「国民的親善の先駆者たらしむること」であったようだ。

では写真を見ていこう。2－01は、革命派であった陳英士追悼会の写真であるが、陳英士とは、孫文の側近であった陳其美のことである。一九一六年五月に上海在住の山田純三郎宅で暗殺された人物である。中央には、黄興、その左右には、頭山満と寺尾亨が居る。また日中盟約に関係した犬塚信太郎や外務官僚の倉知鉄吉、それに宮崎滔天などの姿が見える。2－05～13は、黄興の遺体及び、葬儀の模様の写真である。日本で行われた追悼会には、水野梅暁をはじめ、生前黄興と親交のあった頭山満、犬養毅、寺尾亨や宮崎滔天の長男である宮崎龍介らの姿を見ることができる。

続いて2－15は、孫文、水野、頭山そして大谷光瑞（一八七六－一九四八）ほかの集合写真である。大谷光瑞と孫文の合影は珍しく、実に貴重な写真である。写真台帳には、東京本郷湯島にある写真館名があるので、東京で写されたものと推定されるとあるが、この写真は、一九一六年上海で撮影されたものである。上海孫中山記念会編『記念孫中山先生誕辰130周年』によれば、一九一六年一〇月三一日、黄興が病没した。一一月二四日に、孫中山と慰問に来た友人たちが、ハートン花園で一緒に撮影したものであるという説明を加えている。当時大谷光瑞は、上海に在住し、[7] 近隣の孫文とは、来往する間柄であったし、また上海領事有吉明も同席していることからも上海で撮影されたと思われる。[8]

2－16、17は、孫文の死後、慰霊祭が日本各地で行われたが、東京芝の増上寺で行われた慰霊祭は、頭山満、犬養毅、そして渋沢栄一が発起人を務め、水野梅暁をはじめ、加藤高明首相、田中義一、後藤新平、小川平吉ら生前孫文と交流のあった人たちや中国人留学生など多くの人々が弔問に訪れた。2－18は、増上寺で行われた慰霊祭後に、犬養毅が立ち上がり、孫文の思い出を語っている写真である。

2－30～37は、革命派の戴季陶、殷汝耕、そして兄の殷汝驪から送られた写真である。水野は、革命派の人々に対して、物心両面から援助をしていた。とくに殷兄弟に対しては、「浩然吟社」において、匿ったりもしていた。殷汝耕一家に対しては、家族ぐるみの付き合いをしていたようである。

水野は、中国の革命人士だけでなく、日本の大陸浪人関係者とも友好な関係を保っていたようであった。もちろんこの背後には大谷光瑞の影響があったことも忘れてはならないだろう。2－42～49は、頭山満、宮崎滔天、梅屋庄吉、萱野長知から送られてきた写真である。とくに頭山の写真は数多く遺品の中に残されていた。彼らの親交の深さを物語っている。

第三章「水野梅暁と日中外交」では、〝中国通〟としての水野梅暁を描いた写真が多い。〝中国通〟としての水野のスタート点は、上海東亜同文書院に学んだことから始まる。そして、彼は、日中仏教の架け橋となるべく布教権問題に奔走した。その後の外務省嘱託時代には、機密費を得て、西本願寺から辛亥革命直後の南京に派遣されたのである。南京では野戦病院の運営に当たり、革命の戦いの中で傷ついた兵士たちの救護活動に当たった。[9] その反面、上海に出かけ、黄興らと布教権の話をしていたこともわかっている。[10] この時期の水野は、西本願寺の大谷光瑞の信頼を得て、光瑞の側近として、中国各地を駆け巡り、外交の裏舞台で活躍していた時期である。彼は、行政の肩書きを一切持たず、一人の民間人として振る舞っていたが、中国で得た経験と知識から政治外交関係者から注目されていたのである。3－01は、対支五団体歓迎会の席上、撮られた写真であるが、ここにいう対支五団体とは、日華学会、東亜同文会、同仁会、東洋協会、そして日華実業協会を指す。この中国に対する日本側諸団体が、東亜仏教大会の歓迎会を催したのである。太虚、王一亭、後藤新平らの姿を見ることができる。後藤は、領台初期、児玉源太郎台湾総督の下で、民政長官を務め、台湾植民地当時の基礎を築いた人物として知られる。

東方文化事業に関する写真として、3－04～06などを挙げることができる。東方文化事業というのは、義和団事件の賠償金を基に、主として学術研究機関の創設に充てたものである。上海自然科学研究所をはじめ、北京人文科学研究所、東方文化学院などが創設された。3－04は、東方文化事業上海委員会成立記念写真であり、上海自然科学研究所で撮られたものである。所長の新城新蔵の姿も見える。3－06は、水野、内藤湖南、岡部長景らの集合写真である。さらに外務省の対支文化事業の一つとして、「日満文化協会」の創設が挙げられる。[11] 協会の委員としては、岡部長景、内藤湖南、服部宇之吉らが集まった。岡部長景は、旧岸和田藩主の岡部長職の長男であり、水野とは、対支文化事業を通じて親交があった。後年岡部のもとには、水野から玄奘三蔵の遺骨が分与されている。[12] また内藤湖南との関係は、日満文化協会の創設メンバーに依るところが多いが、すでに水野が長沙で学んでいたときから親交があった。満州国総理鄭孝胥が、京都瓶原にあった内藤湖南邸を訪問したときに、通訳を務めたのが水野梅暁であった。[13]

第四章「水野梅暁と満洲」では、主として日満文化協会に関する写真が多くを占めている。水野は満州国建国後、日満文化協会が、「日満学会の協力に依り、東方の文化を保存並びに振興する目的」を以て設立されると、理事に就任し、国立図書館、国立博物館の設立、古建築の保存、東方文化研究の拠点の設立を提案した。とりわけ『清実録』と『四庫全書』の復刻が大きな事業として計画されたのである。満州側では、羅振玉、栄厚らが中心となり、日本側では、内藤湖南、羽田亨、池内宏、そして服部宇之吉らが中心となった。本章における多くの写真は、彼らとの合影である。

4－01は、日満文化協会発足時に撮影した関係者一同の写真である。新京ヤマトホテル前で撮られた写真には、中央に満州国皇帝溥儀が、その左右に内藤湖南と服部宇之吉が、また羅振玉、濱田耕作、林出賢次郎、羽田亨、池内宏らの姿も見える。

4－02は、満州国皇帝溥儀の写真である。4－03は、林出賢次郎が水野に送った写真である。林出は、溥儀の秘書官を務めた人物である。[14] 4－04は、新京で撮られた日満文化協会要人の写真である。中央には、関東軍司令官である菱刈隆が、その左右に鄭孝胥満州国総理、そして張景恵がいる。隣には内藤湖南の姿も見える。張は、もと張作霖配下の軍人であったが、一九三一年の満州事変後、日本軍に協力し、鄭孝胥の後、二代目の満州国総理となった人物である。関東軍司令官が中央に居ることからもわかるように、日満文化協会は、関東軍主導のもとで創立されたといっても、あながち誤りではないだろう。

4－05以下の数葉の写真は、鄭孝胥が来日したときのものである。前述したように、鄭は、一九三四年に来日している。4－07の写真は、東京渋谷の「無私庵」で撮られたものである。岡部長景がホスト役になり、頭山満や政友会の床次竹二郎らの政界で活躍する人も参加している。

4－13は、横浜鶴見にある総持寺で挙行された溥儀の御真影、真筆の贈呈式の写真である。溥儀の弟に当たる溥傑が、その「拝戴式」に参列している。

第五章「水野と中国人脈」は、仏教関係者、革命関係者以外の人脈を確認していこうというものである。水野の幅広い人脈は、例えば5－01～09にわたっては、段祺瑞、張勲、呉佩孚、馮玉祥、張作霖らの軍閥の姿が見える。さらには中国の官僚や文人たちの写真もある。5－31は、画家呉昌碩の歓迎会の写真である。褚民誼たちとの合影である。

引き続き、『藤井靜宣写真集』について、見ていこう。該写真集は、標題にもあるように、方鏡山淨圓寺の所蔵に係る写真である。淨圓寺は、藤井靜宣の自坊であり、愛知県豊橋市にある浄土真宗大谷派の寺である。

目次を掲載しておこう。

はじめに　近代日中仏教交流史における藤井靜宣の位置
第一章　中国以前――靜宣の生い立ちから青年期
第二章　中国留学
第三章　鈴木大拙との旅――「支那仏跡見学旅行」
第四章　中国での活動――日中提携と戦争の間／中国における藤井晋
第五章　息子・藤井宣丸が見た、父・藤井靜宣

の五部構成となっており、『水野梅暁写真集』と同様に、章ごとにコラムが数編、そして論文が付け加えられている。

「はじめに」では、近代日中仏教交流史における藤井靜宣の位置ということで、藤井と中国仏教との出会い、そして関連を書いている。

該書によれば、宗教専門新聞である『中外日報』社に入社二年目の一九二三

年夏に、元大谷派宗務総長石川舜台の回想録を筆記するという社命を受け、金沢の石川のもとを訪れた。石川は、西洋と対抗するために、日本仏教が東アジアの仏教諸国のリーダーシップをとるべきであると主張した。いわゆる仏教的大アジア主義者でありその必要性有用性を藤井に語ったのである。石川の語る仏教を紐帯として、アジアを考えていくという考え方に、藤井もまた興味を覚えたのであろう。[15]

さらに藤井は、生涯の師と仰ぐ水野梅暁と出会うのである。水野については、前半部で紹介しているが、藤井は一九二四年関東大震災の犠牲者を追悼する日中合同の追悼式に参加したが、そのときに通訳を務めていたのが水野梅暁であった。まさに〝かっこよく〟見えたのであろう。

以後、東亜仏教大会では、多忙を極めていた水野を支えた。中国語を学ぶために、一九二八年に上海の東亜同文書院に聴講生として入学した。何よりも中国仏教と向き合うには、やはり水野に倣い、中国人仏教徒と中国語で会話する必要があると認識したからに外ならない。東亜同文書院留学中、中国各地の寺院や仏跡を探訪し、見聞を広めていった。一九三一年におこった満州事変に際しては、東本願寺上海別院に避難し、日本に帰国したのであるが、藤井は一貫して日本の中国侵略に対しては批判的であった。師の水野梅暁が、後年日本の中国侵略に対して肯定的にとらえていたのとは、全く違う態度であった。

第一章　中国以前――静宣の生い立ちから青年期

静宣は、一八九六年三月四日に浄土真宗大谷派眞淨寺住職藤井至静の長男として生まれた。長じて京都の真宗中学から大谷大学に進んだ。在学中には、若山牧水や山村暮鳥らの文人と交流し、文学、芸術を愛する青年であった。この章には、生後まもないころの写真、1－01［誕生100日目の静宣］の写真がある。そして1－09、10には、真宗中学時代の写真、剣道部であったのだろうか、剣道着を着た写真である。中央には後に大谷大学学長を務める稲葉昌丸がいる。さらに大谷大学時代の写真が数葉残されている。1－14の写真からは、文学青年であった藤井の姿が見て取れる。この［南洛詩社会合］の写真は、山村暮鳥や土田杏村といった文人との合影である。

第二章　中国留学

ここでは一九二八年上海東亜同文書院に留学し、帰国する一九三二年初頭までの写真を紹介している。東亜同文書院では、創立者の根津一は、すでに亡く、実質的には、山田岳陽（一八七七－一九三七）が同文書院の精神的支柱であった。山田は、福島県生まれで、二松学舎で漢学を学び、一九一九年に同文書院教授となった人物である。山田との写真が2－01～04など数葉残されている。

また藤井は、同文書院在学中、中国各地の仏跡などを廻っている。2－10は南京鶏鳴寺、2－11は鎮江甘露寺、2－12は金山寺である。それに2－15、16は杭州の霊隠寺、2－17は杭州市内西湖で撮ったものである。2－21～23は普陀山の写真である。さらに2－24～26は寧波

の天童寺や阿育王寺の写真である。

第三章　鈴木大拙との旅――「支那仏跡見学旅行」

一九三四年五月、大谷大学教授鈴木大拙率いる仏跡旅行団の一員として、中国各地を旅した。いうまでもなく鈴木大拙は、禅の魅力を欧米に紹介した世界的に著名な禅学者であった。鈴木は、また藤井の大谷大学在学中の恩師の一人であった。上海では、3－05に魯迅先生と内山完造宅前で撮った有名な写真がある[16]。

さらに蘇州では、3－31、32にあるように、寒山・拾得の故事で有名な寒山寺を訪問している。また、蘇州在住の川南領事をも訪うている。南京では、孫文の稜を訪れたり、また南京総領事須磨弥吉郎の表敬訪問などがあった。今回の仏跡旅行は、ただ単に仏跡を巡るというだけではなく、著名な高僧を訪ねたり、また、仏教界の人物だけでなく政治家や学者、文人との会見も用意されていた。そのせいか、各地で大使館及び領事館に日本政府関係者を訪うている。このことからも、背後には、外交関係者の相当な準備と協力支援依頼があったろうと推測される。政界人とは、南京において、汪兆銘（精衛）国民政府行政院長と会見するのであるが、政治的な問題が浮上してきたなかでの会見であった。

北京では、北京大学を訪問し、著名な学者である胡適と会見している。胡適は、アメリカのコロンビア大学でデューイにプラグマティズムを学び、中国の文学革命に大きな影響を残した人物である。数カ月にも及んだ中日仏跡旅行は、藤井にとっても中国の高僧との交流、あるいは民間交流の大事さを身をもって感得した貴重な旅行であったことは疑いのないことであろう。

第四章　中国での活躍――日中提携と戦争の間／中国における藤井普

一九二五年に日本で開催された東亜仏教大会は、藤井の師である水野梅暁の手腕に負うところが多かったが、その精神を引き継ぐ「日華仏教学会」の創立に関しては、藤井の力がなくては、できなかった。一九三五年一〇月に東京小石川伝通院で、写真4－02にあるように日華仏教学会の発会式が行われた。藤井は該会の常務理事となり、会運営の主導的役割を果たした。

4－03は、藤井と交流のあった中国側の僧侶などの黄輝邦、談玄、墨禅との写真である。

一九三七年から藤井は、大谷派北京別院の輪番を務めた（写真4－09、10）。藤井は、北京別院の創設に関わった人物であり、そのため輪番となったのであろう。4－12以下は、中日各地に赴いて前線慰問や現地での開教工作の写真である。また、北京故宮などで中国人僧侶たちと撮った写真である。

4－19は、北京覚生女子学校の写真であるが、この学校は、一九三八年に北京で「日華仏教婦人会」が設立された際に、東本願寺法主大谷光暢夫人の智子裏方が、中国人陳覚生（北寧鉄路局長を歴任）の夫人である孫鮑蕙から、夫の配慮で学校を作り、経営を東本願寺に委ねたいと相談を受けて創設された学校である。藤井は常務理事を務め、名誉校長に大谷智子が就任した。

4－21、22は、中日各地の東本願寺別院の写真である。21は新京（現長春）で、新京別院の落慶記念写真であり、22は南京布教所前の写真である。

一九四一年には、上海別院輪番及び中南支開教監督を務めた。また、「中支宗教大同聯盟」の理事に就任した。該組織は、仏教、キリスト教、神道などの華中地域における宗教国体を一元的にまとめた組織であり、西本願寺の大谷光瑞前法主などが関与していた。[17] いうならば、国策に応じて活動する団体であった。上海時代の写真は、4－30以下38まであるが、静宣の長女徳子は、上海別院で秘事を務めるかたわら、東本願寺別院幼稚園の主任となった。また、南京に親日の婦人を養成する目的で金陵女子技芸学院を設立した。そのときの写真が4－33、34である。

一九四三年に静宣の帰国送別会の様子を示す写真が二葉（4－38、39）収められている。「東本願寺婦人聯盟」とか「兵隊ばあさん」というたすきをかけている婦人たちとの合影である。

以上駆け足で『藤井静宣写真集』について紹介したが、本文中には、写真の外にコラム数編があり、また開教宣撫官を務めていた実弟藤井晋の写真や、静宣の長男である浄圓寺住職の藤井宣丸氏のインタビュー記事「息子藤井宣丸が見た、父・藤井静宣」（第五章）が収録されていたが、これらのことについては、紙面の都合上全く紹介することができなかった。ただいずれも非常に面白い内容であるということを付け加えておきたい。

＊　＊　＊

今回『水野梅暁写真集』ならびに『藤井静宣写真集』の書評を書くように愛知大学東亜同文書院大学記念センター長・三好章先生から依頼があり、簡単に応諾したが、いざとりかかってみると普通の書評と違い、写真集の書評であることの難しさを感じた。まず膨大な写真集からどの写真を選んでコメントをつけたらいいのかという難しさである。

全般的には、水野や藤井という人物は、あまり知名度の高い人物ではないが、実は日中近代交流史のなかでは、忘れてはならない人物であるということを、この『写真集』は語っている。政治や経済にかかる交流の歴史は、常に第一線にあり、光り輝いているが、文化的交流、とくに仏教による交流という点では、今まで全くといっていいほど、顧みられなかった。最近の近代仏教史ブームのなかで、この写真集が、ただ単に近代日中仏教史交流だけを取り上げたのではなく、もっと広く近代日中交流史のなかで、仏教交流の持つ役割を広く読者に知らせようとしたことの意義は大きいと思う。ただ不満はないわけではなく、例えば大谷光瑞と実弟の大谷尊由を取り違えるという致命的なミス（水野2－15）や、キャプションはわかりにくいところが多々あった（例えば藤井4－23のように、明らかに中国で撮られているのに、キャプションには全く関係のない事柄が記されているなど）。また、単純なミスとして浄圓寺と記すべきところが浄円寺となっている点などが挙げられる（藤井4－34）。

ただ、おびただしい写真集の中から取捨選択され、各々キャプションをつけられ、また、それぞれに興味あるコラムや論文等を挿入されて、読みやすい本が完成したことに対しては素直に喜びたい。願わくば多くの人々にこの二冊の写真集をパラパラとめくっていただければ幸いである。

注

〈1〉 ワークショップ「淨圓寺・鳥居観音史料から見る近代日中関係――藤井草宣と水野梅暁関連資料」二〇一三年二月二一日、愛知大学名古屋校舎。なお白雲山鳥居観音については、毎日新聞二〇一七年一〇月二九日（デジタル版）に日本ワタシ遺産として紹介されている。

〈2〉 石田卓生「水野梅暁ならびに藤井静宣（草宣）と東亜同文書院――非正規学生から見る東亜同文書院の一側面」東亜同文書院大学記念センター『愛知大学東亜同文書院大学記念センター紀要』二五巻、二〇一七年。

〈3〉 坂井田夕起子『誰も知らない『西遊記』――玄奘三蔵の遺骨をめぐる東アジア戦後史』龍溪書舎、二〇一三年。

〈4〉 柴田幹夫「水野梅暁と日満文化協会」『佛教史研究』第三八号に依った。

〈5〉 柴田幹夫「辛亥革命と大谷光瑞」白須淨眞編『大谷光瑞と国際政治社会――チベット・探検隊・辛亥革命』勉誠出版、二〇一一年。

〈6〉 同右書。

〈7〉 本願寺鏡如上人七回忌法要事務所『鏡如上人年譜』一九五四年。

〈8〉 柴田幹夫「孫文と大谷光瑞」『孫文研究』第二一号、一九九七年。加藤斗規「大谷光瑞と上海（1）」『東洋史苑』第五〇・五一号、一九九七年。

〈9〉 柴田、前掲「辛亥革命と大谷光瑞」。

〈10〉 柴田、同右論文。

〈11〉 柴田、前掲「水野梅暁と日満文化協会」。

〈12〉 坂井田、前掲書。

〈13〉 柴田、前掲「水野梅暁と日満文化協会」。

〈14〉 中田整一『満州国皇帝の秘録――ラストエンペラーと「厳秘会見録」の謎』幻戯書房、二〇〇六年。

〈15〉 大谷光瑞もまた仏教を紐帯としたアジア主義者であった。柴田幹夫『大谷光瑞の研究』勉誠出版、二〇一五年。

〈16〉 NHKドキュメント昭和取材班『上海共同租界――事変前夜』角川書店、一九八六年。

〈17〉 「中支宗教大同聯盟」の総裁には、近衛文麿が、また副総裁には大谷光瑞が就任している。松谷曄介「日中戦争期における中国占領地域に対する日本の宗教政策――中支宗教大同連盟をめぐる諸問題」『社会システム研究』第二六号、二〇一三年。